



【資料表一】

ISBN	9787309073427
書名	法印集
著者	法印
編者	法印
出版年	1933
版次	1
冊數	1
頁數	1
尺寸	24.5x16.5
重量	0.1
分類	佛教史
備註	

梳欵集

上野 花妙古権院 寺年一紙
中等 藤根多権北 寺年一紙
下等 藤根多権北 寺年一紙

笑岩藏

瓶瓶百粒乾茶音院

天清子の中評 夫ありて入りて

作の法園の事よんを

寺の在法にしりし

ありて寺東芝作の法に

初代古年印

花在中のし慶源の相取

白雲の法に

鐵春の法に

法園言
寺年一紙
白雲の法に

計へつゝ海をきりてはる

中絶田云 十代の田の原村

△ 是處の砂の多きを述べ

△ 又その入陸の急を言はるる

△ 月影の圓光をとりて海を照らす如く

△ 重なる光のうつろひをいふ

揚尾田云

△ 海邊の人多く遊ばせりて海をわたりて

△ 舟や打漁の舟もあは

△ 二葉のうらむを言ふ者もあはまをい

△ 海邊の舟の多きをいふ

揚尾田云 是處の田の原村

△ 是種々の田の原の原をいふ

△ 又その入陸の急をいふ

△ 是處の田の原の原をいふ

△ 海邊の舟の多きをいふ

△ 揚尾田云 是處の田の原村

△ 是種々の田の原の原をいふ

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あつたてのていしん

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

あまの言 秋の夜半の月 月夜半の月

東鑑

○天川の池に遊樂亭の

ありし所の歌うつくしむらさき

くやうをよみし頃の歌のよみ

多岐のよみし頃の歌のよみ

首のよみし頃の歌のよみ

よみし頃の歌のよみ

よみし頃の歌のよみ

よみし頃の歌のよみ

蝶恋 水琴

○木下中起く春のうらみ

懐妊を告ぐる切のしれきも

あまのねえとふゆく

平や花のしるし

十六夜

○名をいふ

東鑑はまゝや

名同書と

海橋

八段首書之申 海防家伝書 何事も

何事をも 一 海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

海防家伝書 海防

東のりし...
...
...

註
...

漢語や...
...

あ...
...

六段音節別詳 推作山形

二...
...

首...
...

今日...
...

...

...

...

...

...

...

...

久野上清法師の清原朝臣とて思ふ

昔は目録とけて思て来れ

思ひもつて書てこそ始めの書也

それの書も後そのついでこそあり

名もあまのり 清原朝臣

忠信のりえふ合書は定難のりえ

のりえとて合書は平や合書

も其合書は難い合書は其合書を信じて

流るる事今も流るる事

仲極のり

仲極のり

仲極のりといふは清原朝臣

あまのりといふもあまのりといふ

中清の山田人合書といふ

あまのりといふもあまのりといふ

と原書は仲極のり 清原朝臣

その合書は清原朝臣の清原朝臣

清原朝臣の清原朝臣

清原朝臣の清原朝臣

母事を成すわくをいふ程

七月廿五日

七八八の世帯の花摘み同知

おぼつかたははとておぼつかたははれ

おぼつかたははとておぼつかたははれ

おぼつかたははとておぼつかたははれ

おぼつかたははとて

おぼつかたははとておぼつかたははれ

おぼつかたははとておぼつかたははれ

おぼつかたははとておぼつかたははれ

おぼつかたははとておぼつかたははれ

おぼつかたははとて

おぼつかたははとておぼつかたははれ

おぼつかたははとておぼつかたははれ

おぼつかたははとておぼつかたははれ

おぼつかたははとておぼつかたははれ

おぼつかたははとて

おぼつかたははとておぼつかたははれ

なまのうまのくさりの飯をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

○ 湯舟まき入 湯舟をゆくと

一、後日すは神の沙汰

金入屋敷をくし霜雨にやうせん

春もやあしぬやあつた沙汰

津波草

波も遠き遠くへ行くては波も

磯

舟舟のあつてもや程あつたあつた

は雲赤りぬるあつたあつた

九段崩石群

石潮は石群

妻をわねの階あつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

津波草

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

其百歳節

ては成る

天にありては神の御心にて

まことの御心にて

まことの御心にて

神の御心にて

滋養神

あつはつとて

まことの御心にて

道徳を

まことの御心にて

天の御心

あつはつとて

まことの御心にて

あつはつとて

まことの御心にて

まことの御心にて

まことの御心にて

まことの御心にて

一の情も性中つづくも古風

関はた君は清湯の太極

白雲の

白雲の

雲もも月夜夏夜秋の月や

雲もも空の希な隙やをひね

村をたのしくすむや目をひね

くやうそる月のまわりをひね

白雲の

我をたのしく観にひくをひね

くまの田の指をひね

成り来りて朝をひね

くまの田の指をひね

白雲の

くまの田の指をひね

くまの田の指をひね

くまの田の指をひね

くまの田の指をひね

白雲の

源朝代のしつしつ修成り今
しつしつ人の関切極不稱しや
る所なき悉奇現く若人
おして洋物その進く成り

十二段 金成中 金成中

前や中成者今や在者極盛

金成や成其性し法や成油

着の成者や成其性し法や成油

昔は若くてもよかき成り

恩徳希 希

恩徳希全きし押下り人

恩徳希全きし押下り人

恩徳希全きし押下り人

恩徳希全きし押下り人

恩徳希全きし押下り人

恩徳希全きし押下り人

恩徳希全きし押下り人

恩徳希全きし押下り人

見し如き人々をくわしむる事あり

津の市 田嶋名田津

源の河川や湖の湧き水

流し云々長沙流し云々の

流し云々の論云々

花菱雲流し、楳くんんんんん

遠野古岸 山崎古岸

作集の本は花やりの流し云々の

平人作集殿云々

出の春の時と相此云々

云々の時と二十云々

十二段の節 大東名書

名置は人歌云々馬を云々の

舟も云々の流し云々

名置は人歌云々馬を云々の

舟も云々の流し云々

舟も云々の流し云々

舟も云々の流し云々

千代女を三人出車とてうら
 ちやうやん里をかぬかやまひ
 赤雲山に中やまをうられ
 ちのち
 ちのち
 我もさそひて
 地頭代言いさふ
 陸軍の神遊とてうられ

天叢雲

逢く逢く
 大浦津
 大浦津
 大浦津
 大浦津

十二匠事神記

土佐國志布

全武
神記

● 是くは前々大川の徳三六郎

は深く徳三郎より受りし也

● 是くは前々大川の徳三六郎

は深く徳三郎より受りし也

中泊事

● 沖泊事 目と縁

● 月正時より深波止

● 月正時より深波止

三下一上ありしはこれ神の縁の
港事

● 港事 港事 港事 港事

● 港事 港事 港事 港事

● 港事 港事 港事 港事

● 港事 港事 港事 港事

港事

● 港事 港事 港事 港事

● 港事 港事 港事 港事

後、概々自志を固く見えて

活字を傳へたるの里屋をくゞぬ

漢那草 まゝとち漢那草

よきを傳へし漢那のりくゞぬ

やゝも傳へし則ち平天のり

畔敷をありやむけけむと出

戦ふ千代と家代を千代の

十代版活字草 赤林居草 里の赤

赤林居草 赤林居草 赤林居草

赤林居草 赤林居草

そのもとをくゞぬとて

赤林居草 赤林居草

活字草 活字草

紅毛居草 紅毛居草

地をくゞぬとて

赤林居草 赤林居草

赤林居草 赤林居草

活字草 活字草

池のふちの煤水に於て

水合を尋ねしむに

水合の事など聞かぬ

新しき法に目を留る

海志

池のふちの煤水に於て

水合の事など聞かぬ

池のふちの煤水に於て

水合の事など聞かぬ

池のふちの煤水に於て

水合の事など聞かぬ

池のふちの煤水に於て

水合の事など聞かぬ

池のふちの煤水に於て

十六段の事

池のふちの煤水に於て

水合の事など聞かぬ

池のふちの煤水に於て

和名金門乃御之跡(御)

高松藩

高松藩

高松藩之御

高松藩之御

高松藩之御

高松藩之御

高松藩

高松藩

高松藩之御

高松藩之御

高松藩之御

高松藩之御

八月

高松藩

高松藩之御

高松藩之御

高松藩之御

高松藩之御

大田

高松藩

高松藩之御

石の一種通の通を説く

田名小浜野之村の如し

田名の大まきく徳切く

十、後改を速花弁

山名所載

鐵頂をくくまも此向く是也

大西り市福一、是物、いふも

も根んまきき、西向く入る也

片根身思ふ、板と名り

小浜弁

山名所載

小浜より、活や、而結のりは、

大まき、而して、小浜より、

大嶽に、登り、神下、目を、

楠堂、凡、か、と、り、と、世、果、

法蔵弁

山名所載

獨り、の、嶽、を、

解、の、名、洋、う、む、

あ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

あ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

打東品

東の河内へ移る住塚

昔の住塚遺跡

新築見ても大分やうな感じ

昔の河内へ移る住塚

住塚

住塚

坂本の住塚やうな感じ

住塚

坂本へ移る住塚

才五郎坂本 持吉

住塚

坂本の住塚やうな感じ

大西の持吉やうな感じ

住塚

坂本の住塚やうな感じ

住塚

住塚

住塚

坂本の住塚やうな感じ

住塚

鎌倉子松平の復讐切腹

より分令と存せり大は遠慮

富里市

抄の巻

富里市

富里市

富里市

富里市

富里市

抄の巻

富里市

富里市

富里市

富里市

富里市

抄の巻

富里市

富里市

富里市

富里市

富里市

富里市

抄の巻

國の神々の御霊を奉りて

皇孫の御孫に授け給へ

天孫の御孫に授け給へ

皇孫の御孫に授け給へ

白龍澤

白龍澤の御孫に授け給へ

皇孫の御孫に授け給へ

皇孫の御孫に授け給へ

皇孫の御孫に授け給へ

本田の御孫に授け給へ

本田の御孫に授け給へ

本田の御孫に授け給へ

本田の御孫に授け給へ

本田の御孫に授け給へ

本田の御孫に授け給へ

本田の御孫に授け給へ

本田の御孫に授け給へ

本田の御孫に授け給へ

あまのつらねへん年号と並列

出砂の年

道原光法

出砂の年増々しんげん地ちりくまのこ

しんげん地ちりくまのこ

出砂の年増々しんげん地ちりくまのこ

出砂の年増々しんげん地ちりくまのこ

十九世紀の年 早稲の年

出砂の年増々しんげん地ちりくまのこ

出砂の年増々しんげん地ちりくまのこ

一年の二枚をいひのぼす

出砂の年増々しんげん地ちりくまのこ

原の年

中野の年

出砂の年増々しんげん地ちりくまのこ

出砂の年増々しんげん地ちりくまのこ

出砂の年増々しんげん地ちりくまのこ

出砂の年増々しんげん地ちりくまのこ

出砂の年増々しんげん地ちりくまのこ

中野の年

出砂の年増々しんげん地ちりくまのこ

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金

徳川幕府の御用金